



# COVID-19

## 専門職教育の課題

COVID-19の影響が大学教育全般に及ぶなか、対面による実習をカリキュラムの核に置く専門職教育では、特に大きな課題に直面してきました。専門職教育の現場では混乱が生じつつも、従前の教育効果を何とか維持しようと、創意工夫が凝らされてきました。一定の期間を経過した現在の段階では、取組の検証結果も発表されています。今回は、報告事例の多い看護職教育に焦点を当て、COVID-19を経た専門職教育の課題について考えていきたいと思えます。

### 専門職教育における実習の意義

専門職の基本的な性質は、理論知(学知)と実践知(現場知)を組み合わせた専門性をもつところにあります。専門職が社会的に成立していく過程(専門職化と言います)では、高等教育機関で中心的に学ぶ理論知と、現場業務において重要視される実践知の双方の高度化を伴います。また、専門職が社会の変化にあっても維持・発展していくうえでは、個別具体的な現場の知恵を、複数の場面に通底するような学術的な知識体系へと抽象化するという作業が必要であり、職業集団としてこの知識体系の共有・刷新を継続

していくことが大切です(橋本2019,丸山2017)。看護職においては従来から専門職化や専門職としての深化が進められ、理論と実践の橋渡しを行う実習や初期研修の果たす役割が繰り返し認識されてきました(井本2019)。

### COVID-19を受けた看護職教育の対応

しかし、COVID-19の感染拡大を受け、多くの看護系大学では、臨地実習の時間短縮や、学内実習などへのシフトを余儀なくされました。日本看護系大学協議会が2020年8月に実施した調査では、4年次必修の臨地実習の実施状況について、「計画通り実施」と回答した大学施設は19%に留まり、「すべて学内に変更」が74.1%を占めました。

各地の看護系大学では、実習経験の不足を補うべく、演習内容の厳選や、学生同士の接触をできる限り減らすためのシミュレーターを活用、オンラインでの代替実習の試みなど、様々な試行錯誤が行われました。他方、臨地実習の機会が少ない中で育つた卒業生については、医療現場において従来以上にリアリティシヨックを受けることも予想されました。そのため、卒業直前の学

生や、卒業直後の新人看護職を対象にしたフォローアップ研修も、各地の大学において実施されてきました(水戸他2022,中山他2022)。

### COVID-19以降における看護学生の変化

このような変化が看護学生に及ぼした影響は、個人や個別大学の状況により異なりますが、成果検証についての報告の多くでは、代替実習が持つメリットと、臨地実習の時間の減少がもたらすデメリットの双方が指摘されています。オンラインによる代替実習のメリットとしては、動画を通じて繰り返し知識・技術を学ぶことによる習熟や、学生が自分のペースで学習を進めることができる点などが指摘されています(川上他2022)。また、卒業時の実践能力の認識について、既卒生と2020年度卒業生を比較したところ、意外なことに、2020年度の卒業生の自己評価のほうが高かった、との報告もあります(白蓋他2021)。

他方、デメリットとしては、学生間の交流の不足、チームで実践にあたる経験の不足、患者やその家族と触れ合う経験の不足等が指摘されています。また、COVID-19以降の学生における自己評価の高さについては、臨地で実習できていないために現実的な視点からの評価ができていないのではないか、との

点から、自己評価と実際の能力のギャップが生じている可能性が懸念されています。

### COVID-19と専門職教育の課題

以上のような看護職教育の状況は、実習の場面が医療機関ということもあり、専門職の中でもCOVID-19の影響が顕著に表れた事例です。他の専門職教育の分野では、カリキュラムにおける実習の位置づけや期間、実習先の職務内容等によって、COVID-19が与えた影響には濃淡があると考えます。他方、オンライン実習ならではの習熟が見られたことと共に、シミュレーション環境での教育が持つ限界が具体的に明らかになったことは、理論と実践の架橋を核とする多くの専門職の領域、特に対人支援に関わる専門職の領域において、広く共有しうる教訓なのではないでしょうか。(丸山和昭)

### 教育基盤連携本部 高等教育システム開発部門シンポジウム

## 大学の統合や連携によって学生の学びはどう変わるのだろう

日時: 2022年11月4日(金) 9:00~12:30(オンライン)  
 総論: 「大学間統合・連携の可能性と困難」広島大学副学長 小林信一氏  
 講演: 山梨大学・清水一彦氏、関西国際大学・濱名篤氏、名古屋大学・砂田茂氏  
 詳細・お申込はこちらから <http://www.nuqa.nagoya-u.ac.jp/>

### グラフで見る名大生 [15]

## 名古屋大学で学んだことに対する満足度は?

名古屋大学が毎年3月に実施している「学部卒業時アンケート」では、卒業する学部生に様々な意見を尋ねています。今回はそのアンケート結果のなかから、「名古屋大学で学んだことに対する総合的満足度」と「卒業後の進路に対する総合的満足度」を見ていきましょう。図1と図2は2019年度と2020年度の結果です。卒業時には、9割前後の学生が、名古屋大学で学んだことや卒業後の進路について満足していること

がデータで示されています。いずれの項目も2020年度のほうが満足している人が多くいます。ただし2020年度で大変満足(+3)と答えた人は進路に対する満足度のほうが多いのに対し、満足(+3~+1)と答えた人は学んだことに対する満足度のほうが多くなっています。このような満足をもたらす要因について、より詳しく検討することが大学教育の質保証には欠かせないところです。(松本みゆき)

図1 名古屋大学で学んだことに対する総合的満足度 (%)



図2 卒業後の進路に対する総合的満足度 (%)



【出典】名古屋大学教育基盤連携本部「グラフで見る名大生(ポスター)」Vol.5&Vol.6 [http://www.nuqa.nagoya-u.ac.jp/graph\\_poster/index.html](http://www.nuqa.nagoya-u.ac.jp/graph_poster/index.html)

注)「2019年度卒業時アンケート」、「2020年度卒業時アンケート」より作成。「名古屋大学で学んだことに対する総合的満足度についてお聞きします。」「名古屋大学卒業後の進路に対する総合的満足度についてお聞きします。」という問いに対し、「大変満足(+3)から(+2)」、「(+1)」、「(0)」、「(-1)」、「(-2)」、「大変不満(-3)」の7段階で回答させた。各年度の回答者数と回収率は、2019年度が1817名(81.3%)、2020年度が1962名(88.1%)。

かかわるばんへの皆さまの「意見・感想をお寄せください」  
 Eメールアドレス [info@csh.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@csh.nagoya-u.ac.jp)

# Higher Education Glossary

## 高等教育にまつわる用語集

### 大学設置基準

### Standards for Establishment of Universities

大学設置基準は、学校教育法第3条に基づいて、大学における教員数や施設、教育課程編成に関する最低基準を定めた文部科学省令です。文部科学大臣による大学や学部・学科等の設置認可に際しては、この基準にそって審査されます。また、認証評価においても、この基準の履行状況が確認されます。ほかの高等教育機関・課程についても、短期大学設置基準、大学通信教育設置基準、大学院設置基準、専門職大学院設置基準、高等専門学校設置基準があります。

新制大学が発足してからの大学設置認可においては、任意団体である大学基準協会が定めた「大学基準」が審査に援用されていました。公的で明快な基準の必要性から1956(昭和31)年に公布されたのが大学設置基準です。翌年に施行されたのち、時宜にそって幾度もの改正がなされてきました。

たとえば、1960年代後半の学生運動を受けて一般教育の改善機運が高まり、1971年からは各大学の教育方針に基づいて一般教育課程をより弾力的に編成できるように改正されました。1991年には、高等教育の拡大や社会ニーズの変化、さらに新自由主義の台頭という背景をもって、いわゆる「大学設置基準の大綱化」と呼ばれる大改正がありました。この改正によって、学部名称の縛りがなくなり、新名称が次々と生まれることになりました。また、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目および専門教育科目の区分も、この区分ごとの卒業に必要な単位数の設定もなくなり、教育課程編成の自由度が増しました。これにより多くの大学で教養部を廃止するという大変革につながりました。その後の改正のなかにも、教員名称と役割の変更(2006年)、講座・学科目制の規定削除(同)、FD義務化(2008年)、SD義務化(2016年)など、大学組織や大学教育の全般に関わるようなものが含まれています。

2022年10月の最新の改正では、教員配置を柔軟にする基幹教員制度、先導的な教育課程編成のための特例制度をはじめ、社会にひらかれた質保証や教職協働の再構築など、多くの要素が盛り込まれています。今般の改正は大綱化以来の大改正とみなされており、経過措置も数年にわたります。各大学において関連規程を改正し、その運用に留意すべきことはもちろんですが、よりよい大学・大学教育に結びつけていく実践にこそ注力できるようにしたいものです。(齋藤芳子)

### イスラーム世界における宗教留学

西洋化社会に生きる日本の学生が、留学を通じてより先端的で本格的な知識や技術を欧米先進諸国から学び取ろうとするのと同様に、イスラーム世界の学生も、宗教知識を深めるための学びの手段として留学を利用しています。

イスラームの学術と教育における国際的拠点の一つとみなされているのが、970年に創始されたアズハルモスクを源流とする、エジプトのアズハル大学です。2020/21年度は年間に16,720人の留学生を受け入れており、アズハル大学で学ぶ学生の4%程度を占めます(国内学生は全国各地にあるキャンパスに計約36万人)。その内訳は、イスラーム法学部が7,797人、神学部が

4,436人、アラビア語学部が1,231人と続きます。留学生数で見ると、この数はエジプトにおいて世俗的な学問分野への留学生をもっとも多く受け入れているカイロ大学の14,532人(国内学生は約21万人で、比率は7%程度)を上回っています。

エジプトと並んでアラブ諸国のなかで多くの宗教留学を受け入れているのが、サウジアラビアです。近年、多くの湾岸諸国が資源依存からの脱却といった産業構造転換策の一環として高等教育機関の整備を急速に進めており、サウジアラビアもそのような新興留学先に含まれます。サウジアラビアは、イスラームの二大聖都であるマッカとマディーナを擁し、伝統的な宗教教育

の領域では中心的な役割を担ってきました。しかし、近代的な宗教教育機関としての歴史という観点では、宗教留学における現在の要となつてい

るマディーナ・イスラーム大学でさえ設置は1961年で、19世紀後半から近代化に向けた改革を行ってきたアズハル大学には、遠く及びません。アズハル大学とマディーナ・イスラーム大学は、受入留学生の国籍という点でも、違いがあります。マディーナ・イスラーム大学は、比較的満遍なく各地域から留学生を集める傾向にあり、一方のアズハル大学は特定の国の留学生から強い支持を集める特徴があります。少し古い資料ですが、手元にある2002/03年度のデータでは、アズハル大学の留学生は東南アジア出身者が全体の約6割を占めました。アズハル大学が東南アジアに

「強い」要因はいくつか考えられますが、一つは歴史的にこれらの送出国側との間で有機的無機的な関係を醸成してきたことが挙げられます。例えばマレーシアやインドネシアには、アズハル大学と現地教育機関との制度的な接続関係、師弟関係や同窓会組織による人間関係が構築されており、送出国内部で自発的にエジプト留学を選択しやすいメカニズムが存在しています。

イスラーム世界の留学についてみていくと、そもそもイスラームの宗教学のような独自コンテンツ自体が国際戦略の重要な鍵になることや、留学の相互関係を維持・発展させるために送出国側に体制が整備されていることが強みになることなど、日本社会にいる私たちがとつても示唆的なことがらに浮かび上がってくるように思います。(内田直義)

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、下記ウェブサイトよりお申込ください。  
www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info\_form/

### 読んでおきたい

### この1冊

Great Books on University

### アカデミアを離れてみたら

### 一博士、道なき道をゆく

岩波書店編集部編

2021年 岩波書店

本書は、30~40歳代の主として理系の博士たちがアカデミックキャリアから離れたときに感じたことや、その前後での生き方を紹介しています。21人の物語の中で特に印象に残ったのは「准教授からエンジニアへの転身」と題した語りです。博士課程への進学を躊躇する学生に、博士号取得後も多様な働き方があることを伝えたいと考え、大阪大

学准教授というパーマネントポジションを離れて民間企業を目指した姿が描かれています。2つ目は「そこには壁もない境界もない」と題した、大学教員職を辞めて起業した博士の話です。転職の理由は、大学においては自分の望む未来に向かえない気がしたことや、民間企業で手つかずの面白いデータに触れたかったからだそうです。そんな理由で「研

究者としての勝ち組」の安定したポストから離れるのかといふかられそうですが、自分の物差しを使い、その決断に納得できればそれでよいのだろうと感じます。

アカデミアのポストが不安定化する中で、多くの人が程度の差こそあれ、そのキャリアに苦しんだ過去を持つと本書は指摘します。そして、博士のキャリアはアカデミアにこだわらずとも多様な道筋があることや、アカデミアと時折交差しながら道を切り開いた先達の姿を伝えています。これらを通じて、柔軟な生き方を模索する若い博士へエールを送ると同時にアカデミアに属する私たちのまなざしのあり方について問いかけてもいます。(加藤真紀)

### 高等教育研究センタースタッフ(2022年10月現在〔 〕内は専門領域)

センター長 北 栄輔	〔情報学、機械工学、計算科学〕	特任准教授 松本 みゆき	〔産業・組織心理学、キャリア発達論〕	名古屋大学高等教育研究センター 〒464-8601 名古屋市中千種区不老町 Tel 052-789-5696 Fax 052-789-5695 E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp URL www.cshe.nagoya-u.ac.jp
教授 加藤 真紀	〔高等教育学、国際人口移動、知識創造〕	特任助教 竹永 啓悟	〔高等教育論〕	
准教授 丸山 和昭	〔教育社会学、高等教育論、専門職論〕	客員教員 UN, Leang	(カンボジア 王立フノンベン大学)	
准教授 安部 有紀子	〔高等教育マネジメント、学生支援〕	YANG, Cheng-Cheng	(台湾 国立嘉義大学)	
助教 齋藤 芳子	〔科学技術社会学〕	RAPPLEYE, Jeremy	(京都大学大学院教育学研究科)	
研究員 東岡 達也	〔高等教育論〕	村上 正行	(大阪大学全学教育推進機構)	
研究員 内田 直義	〔比較教育学〕	福井 文威	(鎌倉女子大学学術研究所)	